

学会誌のあり方を考える

並木 昭義*

最近学会機関誌のあり方について考えることがある。いくつかの学会の理事、監事をしているが、その理事会でいつも問題になるのは、その学会の予算のかなりの部分が学会誌作製費とその配送費に占められている。学会誌の役割は会員への情報提供、教育と啓発である。特に学会に出席できなかった人達には有用である。そして質の高い論文を掲載し、会員だけでなく他学会員からも評価され、その雑誌が利用されることである。最近、国内の学会誌がそれらの条件を満たしているかは疑問である。その理由は多くの学会、研究会がそれぞれ雑誌を発刊している。商業雑誌が読者層のニーズに合わせて刊行される。物が溢れる時代に雑誌を保管しておくスペースがない。インターネットを利用して論文を読む者が増えつつある。そして各学会誌とも、質の高い原著論文の掲載が少なくなっていることなどが挙げられる。すなわち学会誌に対する馴染みが薄くなっている。特に学会認定医制度をもっていない学会誌は、原稿を集めるのに苦労している。質の高い原著論文減少の理由は、*impact factor*のない雑誌に投稿しても業績として高く評価されない、特に大学関係者には論文作成の苦労が報いられないことである。また質の高い仕事や貴重な症例の論文であれば、*impact factor*の高い欧文誌に受け入れてもらえるからである。欧文誌に採用されないのは、以前に言われていた英語が上手に書けないからではなく、自分達の仕事や症例の内容が、論文として掲

載するだけの価値が無いからである。最近気になるのは、論文作成や投稿の意義について、きちんとした教育指導を受けていない、あるいは受けていても自分勝手に理解している者が多くなっていることである。上司の者は論文の指導と投稿時に確認をすることである。論文作成が上司と若手の共同作業としての意義を認識し合えるし、信頼関係を作るのに役立つ。また二重投稿、盗作疑いなど、不名誉になることを回避できる。そして論文形態が整っていると、査読員がしっかりと内容を見て、論文の質を高めてくれる。それが結局は著者達のため、学会誌のためになる。最近の *Anesthesia Analgesia* では他学会のコーナーを設けて、そこに優れた論文を掲載し内容の充実を図っている。私は数年前から関連する学会誌の統合を提案している。現段階では学会誌の名称、会員数が異なるため負担額、自分たちが作った学会誌への思い入れなどの問題があり、総論賛成、各論消極的という状況にある。しかし学会予算の有効使用、論文作成、あるいは査読、編集にかかる労力の有効活用、そして雑誌として会員の要望だけでなく、社会のニーズに適合させることを考えると、これまで通りの学会誌刊行ではやがて行き詰まりになる。名を捨て、実を取る必要性に迫られる。これから学会誌がどのような方向性に進み学会誌を改革していくか真剣に考え、思い切って実行に移していく時代にきていると思う。

*札幌医科大学医学部麻酔科